

伊藤若冲 着色花鳥版画 考—その制作と受容をめぐって—

後藤健一郎（関西学院大学大学院）

本発表は伊藤若冲が制作した 着色花鳥版画 に関して、制作者側の視点と作品の受容者側の視点から研究発表をおこなう。

着色花鳥版画 は、伊藤若冲によって拓版画と呼ばれる 乗輿舟 、 素絢帖 、 玄圃瑤華 に続き、明和八年(1771)に制作された。その制作の契機、意図がいまだに明らかではなく、拓版画作品群と同じく花鳥の背景には何も描かれず漆黒に覆われることから、拓版画から発展させた作品であると考えられている。しかし次に示す事例から、着色花鳥版画 の作品の構成は拓版画からの発展という以上の理由があると考えている。

宝暦八年(1758)に京、大坂、江戸の三都市で鸚哥の見世物がおこなわれた。京では『奇観名話』という版本が出版され、十羽の鸚哥(インコ)の図と解説より、着色花鳥版画 に描かれる鸚哥がほぼ扱われている。同じ鸚哥が描かれるというだけで見世物と着色花鳥版画 制作に関係があったと短絡的に結論付けるわけではないが、鸚哥の解説において数種類の鸚哥の羽には「光あり」という記述が散見されることに注目する。ここで着色花鳥版画 における花鳥の表現方法を確認すると、花鳥と背景の漆黒の境界には、金色の線によって縁取りされていることに気づく。宝暦八年以前に出版された『大和本草』、『和漢三才図会』では、鸚哥の記述はあっても中国の本草書『本草綱目』の記事に終始し、「光あり」という言葉はない。そこで着色花鳥版画 における漆黒の背景も『奇観名話』の鸚哥の羽に「光あり」とする表現が関係しているのではないだろうか。

他方、鸚哥図という視点から円山応挙が明和七年(1770)に制作した 青鸚哥図 にも注目する。応挙と若冲は『平安人物志』でも必ず隣り合わせて名前が掲載されているが、二人の絵師は同時期に同一モチーフを用いた作品制作を何点か試みている。乗輿舟 と 淀川兩岸図巻 、 着色花鳥版画 と 青鸚哥図 、制作時期は不明ながら同一モチーフとして 百獣図屏風 と 群獣図屏風 などが挙げられる。着色花鳥版画 と 青鸚哥図 の制作時期はほぼ同時期であるが、両作品はまったく異なる作品になっている。応挙筆 青鸚哥図 に描かれる鸚哥は図譜からの図様の転用が想定されているのに対し、若冲が表現する鸚哥は、版画作品ながらも鸚哥の生態を巧みに捉えた作品であると考えられる。両作品の比較検討を行うことで、前に述べた鸚哥の見世物の影響と若冲による絵画制作の一例があきらかになるだろう。

さらに、『奇観名話』で跋文を記す九如館鈍永という狂歌師に注目し、着色花鳥版画 の受容者層として今まで論じられることのなかった上方狂歌壇を想定する。以上、作品の制作者と受容者という二つの観点から着色花鳥版画 を論じることで、若冲研究における新たな視点をもたらすことができると考えている。